

河村 清明 (かわむら・きよあき)

1962年、山口県生まれ。北海道千歳市在住の競馬コラムニスト。著書に「馬産地ビジネス」「ウオッカの背中」など。1996年「優駿エッセイ賞」受賞。



吉川 良様

昭和の競馬オヤジ



河村 清明



往復書簡

吉川 良



奥様のご逝去、無念でなりません。届きたい言葉はたくさんあっても、こういう時、手紙は不便です。何を書いても便せんから、体温に似た何かが抜け落ちてしまう気がします。お悔やみの言葉は、当たり前前ですが、会って直接お伝えするべきものなのでしょう。

鎌倉を訪ねた際はいつも、ビールと手料理でもてなしていただきました。酔っ払ってしま、突然泊めてもらうことになって、笑顔で布団を敷いてくださいました。前回の手紙に一茶の句が引用されていたね。僕からも、一茶の句を。

〔亡き母や 海見る度に見る度に〕

年内には必ず焼香に伺います。年が明け、われわれの1年はまた金杯からスタートしました。悲しいかな、「金杯で乾杯」の夢破れた7日の火曜日、さっそくお世話になった店があります。行きつけのマッサージ店のことです。

若い頃から肩こりのひどい僕は、ストレッチに励んでも、首肩がすぐガチガチに固まります。仕事に根を詰めていることもあって、最近はいよいよお世話になっていきます。〔おめでと〜ございませす〕

そんな挨拶をもらい、馬券疲れを癒す90分

の施術は始まりました。この治療院は人気が高く、商業ビルの一室にベッドが10以上並んでいます。カーテンに囲まれていて、まわりは見えません。

たとえば競馬場での僕たちがそうであるように、人の行動は不思議にパターン化していきます。パドックやスタンドのどこに立って、どの売店で何を買って、帰り道、どの酒場でくだを巻くのか。

僕のマッサージも曜日や時間帯がほぼ固定されていて、姿は見えずとも、似た行動を取る「仲間」の存在を感じます。おしゃべり好きな女性の声が毎度聞こえてくるのです。

彼女と担当者との会話に耳を止め始めたのは、天皇賞がどう、ドウデュースがどう、と競馬の話題が多いためです。ちなみに僕は、マッサージは黙って受けるのが好きで、うつ伏せ無言の状態の中、その競馬談義を盗み聞きすることになります。

「金杯はどうだったんですか？」と施術者。「ハズレたわよ……JRA神社に今年もお賽銭あげちゃったわ」と女性客。しゃれたことを言います。

「昨日、嬉しかったんですよ」
若い(声)施術者が続けたのは、6日の中山メイン、フェアリーステークスを勝ったエ

心配、ありがとう。63年も一緒だったかみさんの死は悲しい。悲しいけれども、悲しがつてばかりいたら、たぶんかみさんも悲しむので、なるべく明るく暮らそうと自分に声をかけています。

七七日忌の法要を済ませ、正月になって、近所に住む大学の先生が遊びにくる。64歳の彼の専門分野は西洋美術史。画家パウル・クレーの話になると止まらなくなるので、私は彼を「パウル氏」と称んでいる。

パウル氏と正月にいつも話題になるのが、東洋大学が毎年発刊する「現代学生百人一首」。

「ビールアルみんな追われる2分間今日も昨日も真っ黒リアル」という男子高校生の歌を、パウル氏が話題にした。

「朝日新聞の天声人語がこの歌を取りあげていてね。毎日違う時間に通知が来て、2分以内に写真を撮って共有するとか書いてあった。SNSのBeer is Z世代の人気アプリだとかとも書いてあった。

しかし私にはチンプンカンプン。困った世の中になったものだ」

とパウル氏はビールをのみながら言い、「おれはあなたよりもチンプンカンプン」

リカエクスプレスやPOGで指名しているからでした。

「桜花賞、勝ってくれないかな」
気持ちはよくわかります。

2人の会話はいつしか「今年の競馬目標」に移り、施術者が言いました。

「WIN5でも何でも、とにかく1回、100万単位で設けたいんですよ。そしたらボク、たぶん馬券やめます。別の優雅な趣味に移行しますね。桜花賞で勝負するかな」
「何言ってるの。おいしい思いして、やめられるわけないじゃない」

そんなやりとりで、僕は昔は「今年の競馬目標を立ててたなア」と思い出しました。新宿や府中で仲間と新年会を開いては、今年はいくら儲ける、あの馬にあのGIを勝って欲しい、と口角泡を飛ばしたものでした。そうした集まりに、いつのまにか参加しなくなった自分に気づきます。いかんですね。競馬でも何でも、やはり楽しんでなんぼですもんね。

単行本を無事に出せたら、地方競馬を含めて、最低10の競馬場のパドックに立つ！
施術を終え、スッキリした気分の中、僕も競馬目標を決めました。

吉川さん、今年も大いに楽しみましょう。

が、貸金庫から金塊を盗んだりして20億円とかいう事件があるけど、競馬やFXで借金と言われている。FXって判る？」

と私が訊いた。
「判らない」

そうパウル氏が言ったので、私は新聞記事から「外国為替証拠金取引(FX)」と書き写したメモ用紙を取りに行ってみせた。

「ああ、知らないことばかりで回っている社会で生活してるんだなあ」

とパウル氏はお手上げポーズをした。銀行のおばさんが、いったい、どんな馬券の買い方をしていたのかなあと、私はいろいろと推測してみるのだが、判らない。チャンスがあったら、その銀行のおばさんに会って、それを聞きたいなあと思う。

パウル氏は今、「自分のことをバカだと思わない人ばかりになる国への不安」をテーマにして、毎日少しずつ原稿を書いているらしい。「スマホでね、何でも答えが出てくるから、自分のことをバカだと思いう時がない。他人のことをきちんと考えない人ばかり。面倒なことはいたくないというのが人生になる。それが不安で私は、ビールをのむしか仕方なくなっている」
とパウル氏は楽しそうに笑っている。

吉川 良 (よしかわ・まこと)

1937年、東京都生まれ。神奈川県鎌倉市在住の作家。著書に「血と知と地-馬-吉田善哉・社台」「人生をくれた名馬たち」など。1999年「JRA賞馬事文化賞」受賞。



河村 清明様